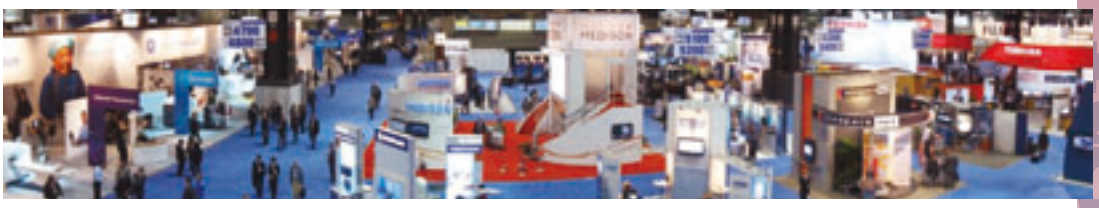
特集

RSNA 2009 Quality Counts

2009年11月29日（日）～12月4日（金）の6日間，米国イリノイ州シカゴ市のマコーミックプレイスで，第95回北米放射線学会（RSNA 2009）が開催された。放射線医療の質の向上をめざして“Quality Counts”をテーマに掲げた今回は，5万6824人が参加。Technical Exhibitsには706社が出展した。本特集では，エキスパートの先生方が領域別にRSNAのトピックスをレポートする。なお，Technical Exhibitsについては，1月号別冊付録『RSNA 2009 ハイライト』，インナビネット「RSNA 2009 スペシャル」（http://innervision.co.jp/）も，参照されたい。



放射線医学の質の向上に向け，“Quality Counts”がテーマに

RSNA 2009初日の11月29日，マコーミックプレイスのArie Crown Theaterでは，恒例のPresident's Addressが行われた。

今回の大会長は，アリゾナ大学放射線科教授のGary J. Becker, M.D.。Becker大会長は，President's Addressにおいて，“Quality Counts”をテーマに講演を行った。講演の中でBecker大会長は，米国における医療事故の状況などを報告。Qualityを上げていくことが放射線医学にも求められているとし，“Quality Matters”，“Quality Improvement”，“Quality Radiology of the Feature”の3つのポイントを挙げた。その上で，Quality向上のために，ITを活用するなどの方策について説明した。

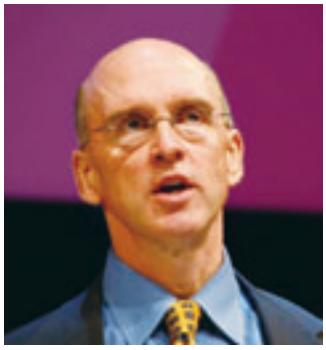
この大会長の講演に続き，同じく“Quality Counts”をテーマにしたOpening Sessionが行われた。モデレータはRobert M. Quencer, M.D.。まず，Pay for Performance（P4P）を進める医療機関や保険会社などで構成される非営利組織National Quality Forum（NQF）のPresident兼CEOのJanet M. Corrigan, Ph.D., MBA.が，“National Priorities for Transforming Health Care：Opportunities for Certification Boards”と題した発表を行った。Corrigan, Ph.D., MBA.は，自身の立場から質の向上について述べた上で，NQFの活動への協力を求めた。これに続いてStephen J. Swensen. M.D.が発表した。Swensen. M.D.は，“Patient-centered Radiology”と題し，患者さんの視点から見た放射線医学に求められているキーワードとして“the information to choose”，“the right exam”，“open communication”，“a fair cost”，“a safe exam”の5点を挙げて説明した。

〈0913-8919/10/￥300/ 論文 /JCLS〉

大会長を務めた
Gary J. Becker, M.D.

Opening Sessionのモデレータ
Robert M. Quencer, M.D.

Opening Sessionで発表する
Janet M. Corrigan, Ph.D., MBA.



Opening Sessionで発表する
Stephen J. Swensen. M.D.

応募演題数は過去最多の15891題

今回の演題応募数は，Scientific PostersとPapersが6769題，Education Exhibitsが4122題で，合計すると過去最多の1万891題となった。採用数については，Scientific Papersが1750題，Postersが712題，Education Exhibitsが1735題（Cases of the Dayの14題を含む）。

Education ExhibitsやCases of the Dayの会場となるレイクサイドラーニングセンターは，2006年の開催時にMolecular Imaging Zoneが設けられたが，今回，そのすぐとなりに，RSNA 2009の重要なテーマの1つでもあったQuantitative Imaging（定量解析）に関連したコーナーが設けられた。12月2日には，レイクサイドラーニングセンター内で，Education Award Winnersが発表され，日本人研究者もCum Laudeをはじめ多数受賞した（48～67ページ参照）。

“やさしい”技術が目立ったTechnical Exhibits

一方，例年RSNA会場内だけでなく，世界各国に話題を提供するTechnical Exhibitsには，世界的な経済不況が長引く中706社が参加。5年連続で700社以上が出展したものの，前年を下回る結果となった。これに伴い，2008年からサウスビルディング（ホールA），ノースビルディング（ホールB），レイクサイドセ

Education Exhibitsなどが行われる
レイクサイドラーニングセンター

新設されたQuantitative Imagingのコーナー

人だかりができているCases of the Dayのコーナー

レイクサイドラーニングセンターの電子ポスターコーナー

サウスビルディング：ホールＡの様子

ノースビルディング：ホールＢの展示

レイクサイドセンター：ホールＤの会場内

ホールＤに設けられたJAPAN Pavilion

ンター（ホールＤ）の３ホールに拡張された会場も，展示面積が51万6100平方フィートから45万6525平方フィートへと縮小された。また，初出展の企業数は，全出展社数の15％にあたる112社となった。

こうした中，今回は，「画期的な新製品・技術」と後世まで語られるような発表はほとんどなかったように思われる。それよりも患者さんの負担を軽減したり，ユーザーの操作性や利便性を追究した技術を搭載した製品が多く発表された。例えば，CTでは被ばく低減対策が挙げられる。各社が小児検査への適応などを考慮した低被ばく技術をアピールしていた。加えて，CTではデュアルエナジー技術も各社が力を入れて取り組んでいることがうかがえた。一方，MRIはガントリの開口径を拡張したり，ポジショニングから撮像までをワンボタンで行える自動化技術が紹介されていた。そのほかのモダリティ別の技術の方向性としては，X-rayに関してはFPDの軽量化・ポータブル化，核医学ではPET/CT，SPECT/CTのCT機能の強化，ITではRIS，PACS，ワークステーションの機能の統合などが明確になってきていた。

また，Technical ExhibitsのホールＤでは，日本貿易振興機構（JETRO）と日本画像医療システム工業会（JIRA）が中心となり，日本の技術力を紹介する場として，JAPAN Pavilionが設けられた。

◎

RSNA 2009には，トータルで5万6824人が参加した。前年の5万8795人から減少したものの，放射線科医は1万5644人が参加し，新記録となった。さらに，RSNA会員の参加が1万1058人となり，こちらも記録を更新した。また，海外からはこれまでで2番目に多い数字となる9060人が訪れた。

なお，RSNA 2010は，マコーミックプレイスを会場に11月28日（日）～12月3日（金）の日程で開催される。テーマは，“PERSONALIZED MEDICINE：In Pursuit of Excellence”。大会長は，Hedvig Hricak, M.D., Ph.D., Dr. h.c.が務める。

快晴の空に映えるマコーミックプレイス